

18 世紀における歴史・社会の唯物論的把握の一典型

—John Millar の “*The origin of the distinction of ranks, 1771*”¹⁾ の意義—

大野 精 三 郎

I 問題の展望と主題の限定

この国で知られること少かった John Millar (1735—1801) の著作『階級の起源』1771 年を約 2 世紀を経た今日事新らしくとりあげることに、すぐれてふたつの意義があるように思われる。ひとつは、その社会学的・歴史的分析がイギリスの古典派経済学、とくに Adam Smith (1723—1790) の “*Wealth of nations, 1776*” の成立に果たした役割のためであり、他のひとつは、それが 18 世紀における歴史・社会の唯物論的把握をもっともよく代表しているためである。

Wealth of nations の 5 年前に刊行された『階級の起源』は、前世紀末、1763 年代の Smith の『Glasgow 大学講義』の発見・刊行によって新らたな意義をあたえられたように思われる。これによって Hume (1711—76), Smith および Millar の関連が明かとなった。すなわち、のちに述べるように Millar の書物は、『Glasgow 大学講義』の Smith のまっただけ影響下に成立し、Smith の企図を完成したものであることを明らかにしているからである。Millar はそこで Hume と同じ政治原理から

1) 原著名は詳しくは *The origin of the distinction of ranks; or, an inquiry into the circumstances which give rise to influence and authority in the different members of society, 1771*. この論文では 1781 年の第 6 版を用い、*Ranks* と略記して引用する。Millar のもう 1 つの書物は *Historical view of the English government from the settlement of the Saxons in Britain to the Accession of the House of Steuart, 2 vols. 1787*. である。この書物は 1803 年にこの title に “*to which are subjoined some dissertations connected with the history of the government from the Revolution to the present time*” が追加され 4 巻本であらわれた。この論文では 1818 年の第 4 版を用い、*Historical view* として略記して引用する。両書の利用のために神戸大学図書館・慶応義塾大学図書館から多く便宜を受けたので、謝意をあらわしたい。

出発して、歴史・社会の唯物論的把握を Hume より徹底した形で遂行することによって、Hume と反対の政治的帰結に到達し、そのことによって *Wealth of nations* の成立に寄与したのである。そこでわれわれに、18 世紀後半のイギリスの「政治的危機」に触発されておこった政治論争のなかで、Millar の批判した Hume の『政治論集』1752, *History of England, 1754—62* における見解を明らかにしておくことが、Millar を理解するための不可欠な前提となってくる。そしてこのばあい当時のイギリスの政治・経済の具体的状況のなかでみなければ、Hume の理論は理解に困難であろう。

イギリスの政治・経済体制は 1688 年の名誉革命以後直線的に議会政治＝産業資本主義体制へと向ったのではない。18 世紀は、経済的には、重商主義体制の解体と産業資本の発展を準備した時期であったし、政治的にも、旧封建貴族と商業資本の結合のうえに一時的にも王権が拡張され、産業資本は議会のなかにほとんどその代表者をもたなかった時代でもあった。George III (1760—1820) が即位するや、かれは失われた王権を回復し、内閣を王の召使の集りとし、議会を王の道具にしようとする執拗にして計画的な努力を傾けたのであった。そしてこの努力を挫くために、国家体制の根本にまで遡る抗争が不可避となったのであった。内閣が国王の道具となり、議会在国王の買収行為の場となったことにたいする国民の反感は、Wilks 事件——国王と政府を新聞紙上で攻撃し、何回も処罰され、議会から追放されたが、いくたびも選挙され、ついにはロンドン市長となる——結果を生んだりした。対外的には旧植民地体制を維持しようとし、貿易の独占、植民地への課税、奴隷貿易の支持は、アメリカ独立革命を誘発することとなった。アメリカの独立革命は Pitt, Fox 等々

のイギリス政治家によってイギリス人の自由と権利にたいする国王およびその一派との戦いであり、アメリカのイギリス人と国王のドイツ人傭兵との戦いと考えられ、多くのイギリス人によって支持された。アメリカ独立革命はイギリスでは、イギリス憲法と王権との戦いであった。

Humeは当時の政治論争の基礎となっていた神授権説と社会契約説の双方を批判して政治理論を人間の本性と経験に基礎づけられた権威(authority)と功利(utility)の原理のうえに新たに建設しようとした。かれは王権の基礎を神の意思におく中世から伝承された神政論的見解を批判したばかりではない。自由な・独立の個人または家族が契約によって社会をつくったという自然法思想をも非歴史的であるとはげしく批判し、歴史と経験にもとづき、人間の生活は、その自然的傾向と習慣から根源的に社会生活であることを明らかにし、国家はこの社会生活の一定の発展段階から生まれること、すなわち軍事的能力や体力の優れた人間が政治的支配権を握り、次第にその社会の他の成員にたいし権威を獲得し、支配を完成する過程を明らかにした。このような政治的支配への服従は重力や抵抗の法則のような最も一般的な自然法則のように、人間社会の習慣に基礎をおいている。この権威をささえるものは社会を維持することから生まれる有用性、すなわち功利の原理である。すなわち強者の弱者にたいする、また暴漢の正義公平の士にたいする侵害を防ぐ法律、行政官、裁判官のいないところでは、人は社会で、少くとも文明社会で、生存しているということはいかなる場合もかれは考えた。かれは近世における商業および製造工業の発達による商人・下層民の経済的独立が、政治的自由と議会政治の主要な原因であることを正当に認識していたが、なお社会を維持するためになんらかの権威、すなわち国王を必要であるとみていた。このことは、かれにあって財産の分布の変動が政治権力に影響することを認めていたが、しかしその基礎とすることができなかつたところにあらわれている。かれによれば、あらゆる統治には公然または隠然の内部闘争がたえない。つまり権威と自由とのあいだの抗争であるが、

そのいづれもが絶対的な勝利を得ることができないと判断し、両者のあいだの均衡をうることが必要であるという結論に到達した。

このような観点から王権の回復・伸張を歓迎し、1688年以前には王権がなんら制限をうけていないことを明らかにし、権威の原理が永きにわたって支配していたことを示すことが、かれのイギリス史の目的であった。しかしHumeの理論は統一的にも体系的にも示されたわけではなく当時のイギリスの政治状況に關説する時論として展開されたにとどまっている。したがって経済的進歩と政治形態との関連を、根本的に究明することはHume以後に残された課題となったのである。

Smithの『Glasgow大学講義』は、Humeの政治理論を踏襲し、政治形態の変化を経済的諸条件、すなわち生計と財産の蓄積に貢献する技術の進歩から分析することを企図したものであった。しかしこの講義ではSmithは全体としてHumeを超ゆることはできなかった。Millarも『グラスゴウ大学講義』の原理と経済の発展段階の区別においてSmithを踏襲し、経済と政治形態の変化をSmith以上の資料をもとにして歴史的にあとづけているが、Millarの進歩は、統治の原理を歴史的に位置づけ、経済と政治の因果関係を厳密にあとづけたことにある。すなわち歴史的に、権威の原理は近代社会以前の社会に適合し、近代社会では功利の原理が支配的であること、すなわち市民の経済的独立と政治的自由とは不可分の関係にあること、したがって近代社会では共和制が不可避であるという歴史的・政治的帰結を導いたのである。この帰結はまたSmithの*Wealth of nations*の立場でもあったのである。SmithとMillarの関係は、このような書物のうえにとどまるものではない。ここでMillarの生涯に簡単にふれておくことが、読者にとって便宜であろう。Millarは1735年ScotlandのLanarkshireで牧師の子として生まれ、少年期の教育をうけたのち1746年Glasgow大学に入学した。そこでJames Watt(1736—1819)と知りあい、Smithの『道徳哲学の講義』に出席した。この師弟の関係は生涯変わることなく尊敬と友情が持続したといわれている。同大学

卒業後学問にもすぐれた貴族 Lord Kames (1696—1782) の家庭に入り、かれの子弟の家庭教師となり、その間 David Hume の友情を得た。1761年、Lord Kames および Smith の推せんによって Glasgow 大学の法学教授に就任し、晩年に至るまでその職にあった。『階級起源論』はこの講義の 1 所産である。ここで展開した原理を基礎としてイギリス史を書き 1787 年に刊行した。Historical view of the English government がこれであるが、この書物は、イギリスの政治史についての Hume の歴史解釈にたいする反論であった。生前は Steuart 王朝の即位で終る 2 巻本であらわれたが、著者の死後、17 世紀についての素描と 1688 年以後のイギリスの政治や階級起源論に関連した題目についての Essay の巻がつけ加えられて 4 巻本で出版された。Millar は、政治的には、当時の Scotland では珍しい ロッキングガム・ウィッグの立場を鮮明にし、アメリカの独立革命には、植民地の側を支持した。かれは普通選挙には、それが腐敗に導くにすぎないとして反対したが、議会改革には賛成した。そして国王の権力の伸張から、政治の危機が起ったとし、それを制限することに努力した。かれは奴隷貿易廃止運動の熱心な支持者であったし、フランス革命に同情し、その挫折を悲しんだが終始一貫して戦争および Burke による『十字軍』に反対した。かれはまた Society of the Friend of the People の熱心な 1 員であった。

Millar を Smith の *Wealth of nations* との関連においみることの重要性は、その政治論との関連だけではない。Millar のもう 1 つの側面、すなわち『講義』における Smith の歴史的方法を徹底させたその歴史・社会の唯物論的把握に著目するときますます重要になってくる。と同時に、Millar を Smith との関連からきりはなして独立に再検討することの必要を生むであろう。

同時代のイギリスの他の著作がそうであるように、Millar の書物も翻訳、流布され、ヨーロッパ諸国に影響をあたえ、ドイツでは Marx の先駆者のひとりに数えられたが²⁾、その認識は、W. Som-

2) W. Sulzbach; *Die Anfänge der materialistischen Geschichtsauffassung*, 1911, S. 66—70.

bart において、『種々の文化領域への唯物史観のこれまでのもののうちで最も完全な適用を示している』³⁾ という評価にまで高められた。これにたいし D. Rjazanov⁴⁾ は、Marx の手稿『ドイツ・イデオロギー』の発刊にさいし、Marx 経済史家 Cunow⁵⁾ の Millar 評価を引用して 18 世紀後半の無数の文化史家の 1 人にすぎない反駁しているが、1930 年代から最近にいたるまで Millar を生んだイギリスを中心として再評価の試みがはじまり、ふたたび Millar の再検討が活潑におこなわれている⁶⁾。

Millar の意義はもとより以上につきるものではない。古代史研究家(たとえば J. F. Maclenan)によってかれの母系社会の叙述が高く評価されているが、この論稿ではたちいることができない。

われわれの主題は Millar のもつ現代的意義に照応しておよそつぎのように限定される。Millar の古典派経済学の成立にさいしての寄与を闡明すると同時に、18 世紀の歴史・社会の唯物論的把握の一典型としてその特徴と限界とを明らかにすることに集中される。そしてこの作業をうえに述べ

3) W. Sombart: "Die Anfänge der Soziologie im Hauptprobleme der Soziologie,, *Erinnerungsgabe für Max Weber*, I. Band, 1923.

4) D. Rjazanov: Einführung der Herausgebers "Aus dem literarischen Nachlass von Marx und Engels,, in *Marx-Engel Archiv*. I. Band, 1922.

5) H. Cunow: *Die Marxsche Geschichts-Gesellschafts- und Staatstheorie*, I. Band. 1920, S. 119. Cunow はそこで Millar が Hume-Smith に従って、政治的支配の成立起源を初期の社会ではひとりの人間の肉体的・精神的能力の優れていることに求めていることから、Millar は階級の経済的基礎をみていないと批判している。しかしかれは他方でこの点での Hume-Smith の見解を高く評価しているのであるから、一貫していないことになるであろう。

6) R. Pascal, "Property and Society: The Scottish historical school of the eighteenth century", in *The Modern Quarterly*, Vol. I, No. 2, March 1938; W. C. Lehmann, "John Millar, historical sociologist", in *The British Journal of Sociology*, Vol. III, No. 1, March 1952; R. L. Meek, "The Scottish contribution to Marxist sociology", in *Democracy and the labour Movement* (ed. John Saville), 1954. 筆者は執筆時に、Meek 以外の論文を手にする事ができなかった。

た問題を絶えず念頭におき、『階級の起源』および著者の死後刊行された『イギリス史』第4巻に収められた主題に関連する論文を資料として、Millarの積極的主張、とくに商業と製造工業の発生と政体との関係を追求することによって果すことを意図している。

II 政府・階級の起源とその進歩

Millarの『階級の起源』は人類の「自然史」(natural history)、すなわち未開から文明へ進む人類の経済的進歩・改善が「人民の習慣、法および政治におよぼす影響」を明らかにすることを意図するものである。「序言」のなかで、かれはいう——SombartがMillarの唯物史観の完全なる適用を示す根拠として引用しているため全文を引用するが——「世界における法と統治の特有な諸体系の諸原因をさがしだすにあたってわれわれは疑いもなく、なによりもまず状況(situation)の相違——これが個々の住民にそれぞれちがう見解と動機とを暗示する——におもむかなければならない。この種のものは、土地不毛であるか肥沃であるか、土地の生産物の性質、生活資料を獲得するために必要とされる労働の種類、1つの社会を形成する住民の数、諸技術への熟達、住民相互が交通に入り親密な交通を維持するための諸利益である。しばしばこれらの点、または他の細かい点にあらわれる相違(variety)は、国民の大多数に必然的に巨大な影響をおよぼすのである。これらの相違は、それが住民の気質と職業に特殊な方向をあたえることによって、その相違に対応した習慣、気質および思考方法を生みだすにちがいない」(Ranks, p. 2—3)。これらの相異を生みだす要因のうち、偉大な立法者の意思によって生みだされるという説は、立法は人民の状況に適合しなければならないということによって否定される。また、土地の不毛または肥沃などの自然的諸条件に帰する考えも、「同じ気候の下でも時代がちがうと、ちがう経済・政治組織が生まれる」ということによって否定される。したがって法・政治の相異を生みだす要因は、Millarにおいては「生活資料を獲得するために必要とされる労働の種類」すなわち、狩猟、牧畜、農業、および商業・製造工業の4つであり、

それが歴史的に継起してあらわれるため、この4つの経済段階が重要となってくる。そして、このさい4つの経済段階における財産(property)の形態とその拡大にともなう変化が最も重要である。というのは「人々のあいだでの財産の分布こそかれらの政治形態を決定するのに与って力のある主要な事情」であるからである。「序言」で述べられた他の要因は、これからみればすべて副次的なものとみなしてよいであろう。このようにして、4つの経済段階と政治形態との関係を財産の形態・拡大を媒介してあとづけることがMillarの課題となるのである。

I 狩猟の時代——「未開の時代、すなわち人間が狩猟と漁で生活しているときには、かれらはまだ目にたつ財産をもつ機会がないので、そこには個人の階級的区別がまったく存在しないが、しかし精神または肉体の優越から生まれる個人的才能からの区別が生まれる」(Ranks, p. 177)。これらは他の同じような種族との闘争を遂行するためひとりの指導者を必要とする。これが政府の起源である。「力、勇気および他の能力がひとりの人間を村落または種族における首長たらしむる事情である」(Ranks, p. 177)。

II 牧畜の時代「しかし人間がみづからの状況をもっと快適にするために家畜を馴致するようになると、それまで知られていなかった他の影響力と権威の源泉が生まれてくる。(かくて富である畜群のなかで所有の不平等があらわれ、)貧者は困窮を免れるために、自分たちに生活資料を提供できる富者に依存するようになる。首長の優越とすぐれた能力とはひとりでに、このように導入された富の獲得に使われて、その結果当然かれはその社会における最も富裕な人間となる。かれの影響力はそれにともなって広汎なものとなる。かれは蓄積した資産に応じて高い階級に上り、以前より豪華に生活し、多数の召使と家臣をもつことになる。召使や家臣は首長からうける扶養や保護の代償としてあらゆるばあいかれの権力と威厳とを維持することが習わしとなる」(Ranks, p. 185—86)。

III 農業の時代——農業の初期では牧畜時代の慣行——飼育のための土地の共同使用——によっ

て土地は共有され、作業も協同でおこなわれ、生産物も全社会の財産となる共同社会が成立した。しかし定住して、農業を営むようになると土地の私有が広くおこなわれた。首長はその勢威によってきわめて大きな土地を私有することができた。「土地からひきだされる権威は、単なる個人的才能から得られるそれより大きいばかりでなく、安定的であり、恒久的である」、「かくて父の財産を相続する息子は同じ身分を維持することができるばかりでなく、同時に以前の所有者が獲得した勢力を保持することができる」。その結果「しばしば選挙によって決定された首長の地位が、父から子へ、世襲によって相続されてゆくことになった」(Ranks, p. 186—88)。ところで、この時代には社会の階級は3つにわかれる。農業は首長の土地を耕やす農奴(villein)と首長の親族で首長の利益と威厳を維持し、軍務に服する義務を負う代りに首長によって保護される自由人(vassal)と、そして首長である。これが通常荘園をかたちづくっているが、荘園のうち、最も多くvassalを抱え、最も富裕な首長が荘園全体に君臨するようになる。かくて封建的政府は、国王、貴族および人民からなりたつことになる。そして、貴族同志あるいは国王と貴族との闘争の結果、最終的には、国王が権力を掌握することになったのである。

III 商業・製造工業の勃興と政治体制の変化

ところで封建制は、貴族について新らたな階級、すなわち市民が富を握るようになる時代おくれとなった。「国民のなかでの生活諸技術の進歩は諛個人の運命とかれらの政治の全体の構成のさまざまな変化をともなった」(Ranks, p. 269)。一般に、便利な生活方法から、商業および製造工業を営む都市の住民は、租税によって軍務を免れ、国王はこれで、傭兵を基幹とする常備軍の制度をつくりあげることになる。このように、封建的軍隊の廃止と常備傭兵制度による国王の権力の増大と第3階級の勢力の増大とは、これに続く数世紀のテーマをなす闘争を準備することとなった。

「諸工芸が涵養されはじめると、住民のなかでの労働する部分はちがった仕方で生活の資を得ることができるようになる。かれらは個々の trade

や職業で熟達し、他人の召使になる代りに、自分の費用で働き、その労働の生産物を売却することがしばしば有利であることを知るようになる。この状況にあっては、かれらの利益は、顧客の数に依存するから、特定の1人の不寵をおそれることがほとんどなくなる。売らなければならない商品が良質で廉価であるかぎり、通常、その仕事での成功が保証されることになるであろう。」

「国民が富裕と洗練とにおいて進めば進むほど、多くの商人、職人および工匠が働く機会をもつことになる。そして一般に下層の人民は、これによってかれらの境遇のなかでますます独立的となり、人間の精神に性来の・そして欠乏のみが抑圧することのできる・自由な感情が動きはじめた。かれらが主人の恩寵と保護とを必製としなくなるに応じて、それを得るのに努力を払わなくなり、そしてかれらの注意は一様に、自分たちの職業の遂行のために有用な能力を得ることにむけられた。かつては首長の権力を壮重にするために用いられた虚飾も、いまやまったく無関心のなかにおかれるか、あるいは軽べつされたり、無遠慮にみられるようになった」(Ranks, p. 282—284の要約)。——貴族の財産はますます市民の手に移るようになる。「あらゆる商業国民のなかで観察され、いかなる禁止手段をもってしても妨げることのできなかつた財産関係の推移は、上層階級の権威を弱めざるをえなかった。最近年に富を獲得した人々は、数百年にわたって大荘園の主であった人々によって維持されたような一連の従属関係をつくりだす機会がなかった。かくて、家族の世襲的権威は崩壊してしまった。……貨幣は名誉と威厳を獲得する唯一の手段となった。……一階級が富裕を独占的に恣のままにすることができなくなり、そして勤勉であるならば各人が財産を獲得する希望をもつことができるようになったから国王および古い貴族の特権は次第に少くなり、それに比例して人民の権利が拡大されることが期待されるであろう。そして人民の権利は通常、富に随伴して、ある程度社会の全員のうえに拡がってゆくであろう」(Ranks p. 287—288)。

事態がこのようになってくると、市民階級と国

王との闘争が不可避となってくるが「どちらが成功するかは、特殊な・偶然的な事情による」(*Historical view*, Vol. III, p. 118)。人口稠密な小国では古代共和国、イタリーのように市民階級が権力を握ったが、フランス、スペインのような大国では国王が勝利した。その例外をなすのはイギリスだけである。「封建的軍隊が廃止された James I 世の即位後の大ブリテンの幸運な状況は、この国に外敵の侵入のおそれをほとんどあたえなかったし、常備軍を維持する必要をなくしてしまった。その時代のイギリス国王の弱さと頑迷さは、絶対的権威を獲得する唯一の手段を用いることを妨げた。Charles I 世は、この時代、ヨーロッパの他の君主によって行使された権力を知っていたが、それがどうして獲得されたかについては知らなかった。……かれが議会と決裂したときでさえ、かれには頼るべき軍隊がなかったので、下層民の増大する影響力に屈服することを余儀なくされた。国民が自己の権利を守るためにくりかえしなした努力は自由の愛好を促進・準備し、かくて遂にはおそらく大国において実現可能な最善の模範に従った民主政体 (popular government) を生み出したのである」(*Ranks*, p. 293—295)。

このように政治的・精神的変化は経済的变化に照応するということが強調される。かくて成立した近代社会あるいは自由な精神は2つのものに依存する。「第1に、財産の分布に関連した人民の状態と生活手段に。第2に、社会のさまざまな成員が結合して相互に一致して行動することができる便宜に。」⁷⁾ 市民社会では財産は通常、「絶えざる交代 (constant rottation)」をうける。古き貴族に代った郷紳 (landed gentlemen) も、奢侈を追求するにつれて、かれの土地はますます負債を招き、ついには、譲渡され、節約で勤勉な商人の手に移るからである。下層の人々は、かれらの境遇を改善するために刺げきされ、通常、蓄積できるよう

な勤勉と節約との習慣を獲得する。かくてこのことは、富から描きだされる尊敬や影響力が減少することを意味する。Millar は18世紀のイギリス社会を総括して「イギリスの今世紀における富裕は前世紀をいちぢるしく凌駕し、貧民に蓄積の手段を容易にし、富者に所有地の急速な持ち主の交替を生みだし、したがってあらゆる世襲的影響力の根源である財産の恒常的な状態をくつがえす人為的な欲望をふやしたことは明らかである」⁸⁾。

他方、商業および製造工業の発達「自由により有利な財産の状態を生み出したと同じく、住民の権利を主張するために団結することの大きな便宜をあたえた。住民は生活手段を得る便宜から群集し、かれらの仕事を便宜よく遂行するために大きな集団に集められる。村落は都市に拡大し、都市はしばしば大都市と化した。これらのところでは、同じ職業に従事する労働者や工匠の大群が生まれ、たえざる交通によってきわめて迅速に自分たちの感情や不満を伝えることができるようになった。人民はあらゆる自分たちの不満に容易に起ちあがり、そのためにまた容易に団結することができた。その結果このような「大都市における民の喧燥をひきおこす行動は、政府の最も奥にまで浸透し、最も大胆な大臣を脅かし、そして宮廷の内密の被護者を退けることができる。商業の利益を代弁する声は、政府の注意をひかなかったことはなかったし、その声がゆるぎなく一致していたときには、国民議会の審議を統御し、指導することさえできるのである」⁹⁾。

IV Millar の歴史の歴史把握の特徴

以上が Millar の『階級の起源』に示された経済の発展段階と政治形態との因果関係である。われわれはさらに進んで、Millar が近代社会の政治形態把握のうえで、Hume からの進歩・転換がなにによってひきおこされたかを問はなければならない。この問いの答えによって、Millar は Hume と功利の原理の解釈においてきわめて異なることが明らかとなり、それがかれの歴史把握を、第1に特徴づける。われわれは Millar が、功利の原理を

8) *ibid.*, in *Historical view*, Vol. IV, p. 132.

9) *ibid.*, in *Historical view*, Val. IV, p. 136—37.

7) The advancement of manufactures, commerce, and the arts, since the reign of William III, and the tendency of this advancement to diffuse a spirit of liberty and independence, in *Historical view*, Vol. IV, p. 114—115.

近代社会の政治原理としていることをみたが、実はこの原理は Millar においては Hume とちがい、Locke の自然権の思想と結びついていることに注意しなければならない。Millar は契約によって社会が成立するという説明は避けてはいるが、社会はその成立以前に個人がもっている権利を制限するが代りにそれに償う利益を提供しなければならないという考えを根柢としている。Millar はいう。「文明 (civil society) の形成にさきだつて人間に属する自然権 (natural right) がある。われわれは自然の状態においてわれわれが肉体的安全を維持し、他人の権利を侵害しないかぎり、われわれの自然的自由 (natural liberty) を行使する権利があるし、われわれが先占 (original occupancy) または労働によって作りだしわれわれの所有とする事物について所有権をもつことができるということは、容易に認識しうるであろう。これらの権利は、われわれが社会に入るとき、いろいろと変化させられるけれども、失われたものではない。それらの権利の 1 部分は、社会状態からひきだされる諸利益のために、疑いもなく放棄されなければならない。たとえば、われわれは侵害に復讐する権利を、法廷によって保護される利益のために、放棄しなければならない。われわれは財産の 1 部を、社会がその保護を提供することができるようにするため放棄しなければならない。われわれは法権力に、その冷静・公平な規則から期待される善き秩序と平和を享受するために服従しなければならない。しかし、われわれの放棄する諸権利は、それによって達成される利益によってつぐなわなければならない。いろいろの制限や賦課される負担は、全体の繁栄と幸福のために必要である以上に大きかったり、数多くあってはならない」¹⁰⁾。このことによって、われわれは、Millar の歴史学が自然法と対抗・依存していることを知るし、Locke の原理が Millar の歴史分析批判の基底に働いていることを学ぶことができる。

第 2 に、Millar の歴史は、経済の発展段階の差別を越えて人間の本質を一般的・普遍的なすがたにおいて捉えようとする啓蒙思潮の欠陥を Hume と同じくまぬかれることはできなかった。歴史的

進歩の起動力は経済の発展段階の区別を超越して、このようにして捉えられた人間の本質から、Millar においては自利心から生まれる。たとえば Millar において農業共同体から土地の私有に進む過程はつぎのように説明される。「人間が農業のいろいろの分野である豊かさをつくりだすようになると、かれらはもはや共同の評議と全員の協議によって農業をおこなう動因をもたなくなる。かれらは共同財産の分配と管理についてたえざる紛争をひきおこし、共同の諸手段に飽み、各人は自己の労働を自己の利益になるように使うことを望み、各人の気質にしたがって享受できる各自の所有権を望むようになる。かくて暗黙の一致によって、村落内の各家族は相互にわかれて、それぞれ別々の土地を耕作するようになった。かくて各人がおこなった労働から生まれるそれぞれの生産物についての権利を獲得したのである」(Ranks, p. 192) と。また封建制内での農奴の地位の向上は、領主と農奴の双方の自利心から説明される。「農奴が広大な土地を耕すため領主からはなれて村落に定住することから、領主は奴隷の行動を監督することができなかつたということは容易に想像されるし、かれらが怠けているという理由で折檻することによって労働させるということも無駄であるということも容易に想像できるであろう。きわめて僅かな経験で、この種の効果がないことが明らかとなったであろう。そして農奴の勤勉を刺げきする唯一の方法は、かれらの仕事に報酬をあたえるということであろう。かくてかれらは、奴隷に通常与えられる食物のほかに、しばしばわずかの報償を得たが、次第に慣習によって正規の報償に転化し、その享受と処分がゆるされ、ついには個々の財産をもつことができるようになった」(Ranks, p. 323)。さらに進むと農民は「主人に、自分たちの報酬に余剰をもつことをゆるされることを条件として、一定の地代を提供することができるようになった。小作人は自らの勤勉から生まれる全利益を獲得するにつれて、地主は偶然的な損失という損害からまぬかれ、一定の・しばしば付加される収入を自己の土地から獲得した。」(Ranks, p. 329) 等々。

V 結 論

以上においてわれわれは Millar の歴史・社会の唯物論的把握を、それがもつ二つの現代的意義に照らして明らかにしてきた。それが、Smith とくに古典派経済学の成立にたいしてもつ意義はおのづから明らかとなるであろう。Millar が Smith の『Glasgow 大学講義』の完成者であることから、従来の Adam Smith 研究にとっての問題点、Smith が『Glasgow 大学講義』で示した歴史的方法は、*Wealth of nations* で展開された抽象的自然法の理論と対立し、矛盾するという Hasbach の批判¹⁰⁾や Smith の『Glasgow 大学講義』における社会契約説の否定を無視して、スコットランドにおける自然法の教説の伝統が古典派経済学を成立せしめたという J. Jastrow の批判¹²⁾は、Millar をまえにしてその力を失うであろう。すなわち Millar の研究は、歴史研究と Locke の自然法的社会観との結合を完成したことを明らかにしているからである。したがって Millar の Smith にたいしてもつ意義からみれば、Smith の自然法思想は、抽象的な個人的自然権としての自由の要求から出発して、歴史的具体的な分析を経て、とくに Hume の功利の思想を媒介として社会的自由の要求に到達したことを明らかにするであろう。そしてあらゆる歴史的過程を通じて経済社会の進歩を最もよく促進する人間の本性、自利心の発見は、自然的自由の制度の要求への重要な貢棒となったことが明らかとなるであろう。これらの点で Millar は *Wealth of nations* の基礎を最もよく示しているとい

うことができるであろう。Millar は Smith に比べて市民社会の経済分析において劣っているが——労働者と資本家の関係を搾取関係としてみないで、むしろ Smith の俗流的側面、利潤が資本の生産力から生まれるという説を継承し両者の関係の調和を考えているが——しかし歴史家としての Smith と共通することは市民社会を自然的・絶対的な形態として捉えていることである。このことは Millar においては、市民社会における労働の在り方、節約や蓄積を可能にする労働、すなわち自利心を最もよく刺げきする労働の在り方が、自然に適ったものであり、歴史の進歩を促進してきたという認識にあらわれているし、また近代社会における階級の存在は自然であり、不可避でもあるという認識にもあらわれている。Millar の Smith、とくに *Wealth of nations* にもつ意義は、おのづから、Millar のもつ独自の意義、Millar の著作が「Marx の唯物史観の完全な適用」を示しているかどうかという問題に解答をあたえることにもなるであろう。ここでこの問題を全面的にとりあつかうことはできないけれども、ただ指摘しておかなければならないことは、うえに述べたことから明らかのように、Millar と Marx との相異を規定する最も大きな要因は、市民社会の把握の仕方にあるということである。Millar においては、市民社会は歴史的に最後の到達点としてあらわれているが、Marx においてはひとつの歴史的社會として、超克すべき矛盾を内包する社会として把握されていることである。だから Millar は市民社会の肯定的側面、すなわち階級の存在を容認し、富裕という観点に立脚して、過去の社会を批判したにとどまる。そのことは人間の本性に適合した自利心が一貫して歴史的進歩の起動力であるとした点にあらわれ、社会は自利心を推進力として漸進的に進化するものとしてあらわれる。このことは Millar の経済発展段階が経済体制の区別として、すなわち歴史的個体として把握されていないことを示すのである。

10) The progress of science relative to law and government, in *Historical view*, Vol. IV, p. 294—295.

11) W. Hasbach, "Adam Smith's lectures on Justice, Police, Revenue and Arms", *Political Science Quarterly*, vol. 12, 1897. p. 684—694.

12) J. Jastrow, "Naturrecht und Volkswirtschaft. Erörterungen aus Anlaß der deutschen Ausgabe von Adam Smith's Vorlesungen", *Jahrbücher für National Ökonomie und Statistik*, Bd. 126. 1927. S. 687—730. 以上2つの論文については高島善哉・水田洋共訳『アダム・スミス グラスゴウ大学講義』1947年の冒頭にすぐれた解説がある。